

3. 普通期稚苗移植栽培耕種基準

(1) ヒノヒカリ・黄金錦・にこまる

項目	要点	実施内容
1. 育苗 (1) 床土 (2) 種子予措 (3) 苗箱 (4) 播種 (5) 管理		<p>早期栽培に準じる。</p> <p>早期栽培に準じるが、浸種日数は5～7日とする。</p> <p>早期栽培に準じる。</p> <p>早期栽培に準じる。</p> <p>早期栽培に準じるが、育苗日数は18～20日を目安とする。</p> <p>シルバーポリトウを使用する育苗方法は緑化期以降、次の手順で行う。</p> <p>(1)対象：4月下旬～5月下旬に緑化を行う稚苗</p> <p>(2)床作りと被覆方法</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 砕土した畑または代かき後ある程度田面を固めた圃場に、幅140cm程度の床を作る。床の長さ10mで約30a分の苗を設置できる。 ② この床に出芽揃期の苗箱を設置する。なお、畑床では苗箱設置前に床面に十分灌水する。 ③ 育苗箱設置後、覆土の洗い落としをかねて灌水する。 ④ トンネルの支柱を立てる。支柱の間隔は約50cmで、トンネル中央部の地上高は40～50cmとする。 ⑤ シルバーポリトウ#80で被覆し、四隅を土でおさえる。 <p>(3)管理の方法</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 通常、朝夕の開閉は不要であり、5日間位は灌水の必要もないが、時々内部の状態を観察する。被覆期間は5日前後。 ② 苗が一定の大きさになれば、強風や低温の日を避けて被覆物を除去する。被覆期間の目安は、2葉が未展開（針状）の場合には第1葉鞘長3cm、2葉が展開しておれば同4cm位までである。 ③ その後移植までは普通の硬化管理を行う。 ④ にこまるは苗が徒長しやすいので、温度管理には留意する。
(6) 病虫害防除		<p>苗立枯病（リゾプス菌）、萎縮病、いもち病、イネミズゾウムシの防除は早期栽培に準じる。</p>
2. 本田の耕起	<p>できるだけ深く耕起すると同時に、生わらや土壌改良資材を施用し地力の維持、増強を図る</p>	<p>(1)前作物はなるべく低刈りとし、残さ量を少なくしておく。耕耘機、トラクターともロータリー耕1回だけとし、イタリアンライグラス跡地のみは2回がけとする。耕深は15cm程度を目標とし、耕盤が不整にならないよう留意する。</p> <p>(2)一毛作田では冬期または早春にケイカル散布後耕起する。特にイネウイルス病流行地帯では3月下旬頃に休閑田を耕起し、媒介虫の食草を取り除く。</p> <p>(3)生わらや土壌改良材の施用の要領は早期栽培に準じる。</p>
野菜及び豆科飼料作物跡の処理	<p>作物残さは土壌中で速やかに分解させる</p>	<p>刈取り乾燥後、畑状態で移植1カ月位前に土壌中にすき込む。この場合は、無肥料栽培とし、ケイカル10a当たり200kgを施用するのみとする。</p>

項 目	要 点	実 施 内 容																																																															
3. 施 肥	肥効と倒伏防止の観点から分げつ期追肥の施用は避け、穂肥の施用時期には特に注意する	<table border="1" data-bbox="630 309 1460 936"> <thead> <tr> <th rowspan="2">土 壤 条 件</th> <th rowspan="2">成 分</th> <th colspan="4">10 a 当たり施用量 (kg)</th> </tr> <tr> <th>基肥</th> <th>分げつ期 追 肥</th> <th>穂肥</th> <th>合 計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">湿 田 半 湿 田</td> <td>N</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>2~3</td> <td>5~6</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>2~3</td> <td>7~8</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">乾 田</td> <td>N</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">漏 水 田</td> <td>N</td> <td>4</td> <td>(2)</td> <td>3</td> <td>7~ (9)</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="638 981 1460 1384"> (1) 穂肥は出穂前20日頃に施す。 (2) 出穂前30~25日の追肥は倒伏を助長するので、施用しない。 ただし、早植で、出穂前25日頃にかなり肥切れした場合（標準葉色板で3~3.5）は、穂肥を2回に分け、25日前と15日前に1.5kg程度ずつ施す。 (3) 水害常習地では窒素施用量を減じる。 (4) 漏水田では葉色を見て、分げつ期追肥を窒素成分で2kg程度施用する。 (5) 側条施肥の場合、基肥に速効性肥料を用いるときは、基肥量を上記基肥量の2~3割減とする。 (6) 緩効性肥料を用いるときには全量基肥施肥とし、施肥量は上記合計量の2割減とする。 </p> <p data-bbox="619 1478 821 1512">4. 整地代かき 早期栽培に準じる。</p> <p data-bbox="135 1556 311 1624">5. 移 植 (1) 植付株数 早期栽培に準じる。 m²当たり15~18株程度、1株3~4本植えとし、中山間部等の初期の生育が劣る場合にはやや密植とする。</p>						土 壤 条 件	成 分	10 a 当たり施用量 (kg)				基肥	分げつ期 追 肥	穂肥	合 計	湿 田 半 湿 田	N	3	0	2~3	5~6	P ₂ O ₅	6	0	0	6	K ₂ O	5	0	2~3	7~8	乾 田	N	4	0	3	7	P ₂ O ₅	6	0	0	6	K ₂ O	5	0	3	8	漏 水 田	N	4	(2)	3	7~ (9)	P ₂ O ₅	6	0	0	6	K ₂ O	5	0	3	8
土 壤 条 件	成 分	10 a 当たり施用量 (kg)																																																															
		基肥	分げつ期 追 肥	穂肥	合 計																																																												
湿 田 半 湿 田	N	3	0	2~3	5~6																																																												
	P ₂ O ₅	6	0	0	6																																																												
	K ₂ O	5	0	2~3	7~8																																																												
乾 田	N	4	0	3	7																																																												
	P ₂ O ₅	6	0	0	6																																																												
	K ₂ O	5	0	3	8																																																												
漏 水 田	N	4	(2)	3	7~ (9)																																																												
	P ₂ O ₅	6	0	0	6																																																												
	K ₂ O	5	0	3	8																																																												

項 目	要 点	実 施 内 容						
6. 除 草	適期に均一散布する	<p>一発処理剤を使用するか、組み合わせ使用を行う。</p> <table border="1" data-bbox="630 309 1460 645"> <thead> <tr> <th data-bbox="630 309 858 383">対 象 雑 草</th> <th data-bbox="858 309 1460 383">除 草 剤 使 用 例</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="630 383 858 517">一 年 生 雑 草 マ ツ バ イ ウ リ カ ワ ホ タ ル イ</td> <td data-bbox="858 383 1460 517">初期剤 + 中期剤 (植代時～移植後7日) (移植後20～25日)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="630 517 858 645">ミズガヤツリ</td> <td data-bbox="858 517 1460 645">一発処理剤 移植当日～移植後30日まで(剤による)</td> </tr> </tbody> </table>	対 象 雑 草	除 草 剤 使 用 例	一 年 生 雑 草 マ ツ バ イ ウ リ カ ワ ホ タ ル イ	初期剤 + 中期剤 (植代時～移植後7日) (移植後20～25日)	ミズガヤツリ	一発処理剤 移植当日～移植後30日まで(剤による)
対 象 雑 草	除 草 剤 使 用 例							
一 年 生 雑 草 マ ツ バ イ ウ リ カ ワ ホ タ ル イ	初期剤 + 中期剤 (植代時～移植後7日) (移植後20～25日)							
ミズガヤツリ	一発処理剤 移植当日～移植後30日まで(剤による)							
7. 水管理	<p>無効分けつ期の間断灌がいと中干しを励行する</p> <p>適期落水に努める</p>	<p>(1)分けつ期間中は浅水とする。</p> <p>(2)有効分けつ期以降出穂前35日までは間断灌がいとする。</p> <p>(3)その後幼穂形成期までは、土壌表面に小さなヒビ割れを生じる程度の中干しを行う。</p> <p>(4)幼穂形成期以降は間断灌がいを行う。</p> <p>(5)落水は出穂後30日頃を目安とし、その後も土壌が乾燥すれば適宜走り水をする。</p>						
8. 病虫害防除	<p>薬剤については、早期栽培に準じる</p> <p>※ヒノヒカリ、にこまるはいもち病に弱いので注意する</p>	<p>(1)葉いもちの防除 葉いもちに対しては早期栽培に準ずる。補植用の取り置苗は早めに処分する。</p> <p>(2)穂いもちの防除 ① 出穂前後の気象と葉いもち病の発生程度を考慮して、穂ばらみ後期または穂揃期に防除するが、穂ばらみ期を重点に実施。 ② 葉いもちが多発したところでは穂ばらみ期と穂揃期の2回防除とする。</p> <p>(3)紋枯病の防除 早期栽培同様穂ばらみ初期(病勢進展期)1回のみとする。</p> <p>(4)もみ枯細菌病の防除 早期栽培に準じる。</p> <p>(5)黄化萎縮病の防除 早期栽培に準じる。</p> <p>(6)ごま葉枯病の防除 カリ、ケイ酸、鉄、マンガンなどが溶脱している水田、根腐れを起こしやすい老化水田あるいは肥料分が流亡しやすい砂質田などで発生が多くなる。防除の基本は、土壌改良と施肥改善であり、薬剤による防除は補助的な手段である。 ※夏季が高温で、肥料の消費の多い年の発生が多い。</p>						

項 目	要 点	実 施 内 容
		<p>(7) 白葉枯病の防除</p> <p>① 幼穂形成期～出穂期に早期発見に努め、下葉の初期発病を認めたら直ちに薬剤防除を行う。</p> <p>② 暴風雨などの前後に薬剤散布する。</p> <p>③ 発病田へは朝夕露のあるうちは作業に入らないこと。</p> <p>④ 伝染源となるサヤマカグサなどイネ科雑草を除去する。</p> <p>※発病適温は25～30℃で、湿度が高いほど発病蔓延しやすい。通常、夏の集中豪雨など風を伴った雨あるいは台風で急激に発生する場合が多い。</p> <p>(8) 稲こうじ病の防除</p> <p>本病は低温で湿度が高く、水滴が乾きにくい場所で発生しやすい。一般的に、生育旺盛な、窒素肥料のよく効いた稲で発生しやすく、遅い追肥は発生を助長する。</p> <p>止葉に落下した本病の胞子が、露や雨滴と共に葉鞘内に流れ込み、出穂前の幼花器へ侵入・感染するので、薬剤防除は穂孕み期（出穂8～18日前）に行うが、いもち病との同時防除をねらう場合には出穂の8～10日前かやや早めがよい。</p> <p>※気温が24～30℃の時、水田で越冬していた菌核に胞子が形成され、降雨があると雨水と共に穂ばらみ期の幼穂に感染する。</p> <p>(9) ウイルス病の防除</p> <p>① 萎縮病：本田初期のツマグロヨコバイを重点防除する。</p> <p>② 縞葉枯病：本田初期のヒメトビウンカを重点防除する。</p> <p>(10) ニカメイチュウの防除</p> <p>① 3回発生型（平坦地域）</p> <p>第1世代 5月下旬～6月下旬</p> <p>第2世代 7月中旬～下旬</p> <p>第3世代 8月下旬～9月上旬</p> <p>② 2回発生型（中・山間地域）</p> <p>第1世代 6月上旬～下旬</p> <p>第2世代 8月下旬～9月上旬</p> <p>③ 防除上の注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2、第3世代の防除はふ化食入最盛期に行う。 ・粒剤は幼穂形成期以降では使用しない。また漏水田では使用しない。 <p>(11) セジロウンカ、トビイロウンカの防除</p> <p>7月上旬～9月下旬に発生する。多発時には倒伏、坪枯れをおこすので、発生予察情報に注意し、8月上旬中心に防除に努める。</p> <p>※日本では越冬できないため、海外から飛来した個体が発生源となる。</p> <p>梅雨前線が中国大陸から九州・四国・本州にかけて横たわり、その上で中国大陸で発生した低気圧が東進してくる時に限られるので、梅雨期の天気図に注意を払い、早い時期に防除して、増殖源を絶つことが重要である。</p>

項 目	要 点	実 施 内 容
9. 収 穫	黒点症状米対策 斑点米対策 刈取適期の判定 ※ヒノヒカリは、刈遅 れると着色粒が発生 しやすいので適期に 刈取る	(12)アザミウマ類の防除 早期栽培に準じる。 (13)カメムシ類の防除 早期栽培に準じる。 平坦部では出穂期後35～40日頃、中山間地帯では出穂期後45日前後に刈取る。 機械収穫上の注意は、早期栽培に準じる。

(2) その他品種

耕種基準の大要はヒノヒカリ・黄金錦・にこまるに準じる。

項 目	要 点	実 施 内 容																																																														
品 種	サイワイモチ	穂数確保のため後期ちよう落の生育を避ける。跡作には不適である。白葉枯病には弱いので常発地は避ける。																																																														
施 肥		<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">土 壤 条 件</th> <th rowspan="2">成 分</th> <th colspan="4">10a当たり施用量 (kg)</th> </tr> <tr> <th>基 肥</th> <th>分けつ期 追 肥</th> <th>穂肥</th> <th>合 計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">湿 田 半 湿 田</td> <td>N</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>2~3</td> <td>5~6</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>2~3</td> <td>7~8</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">乾 田</td> <td>N</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">漏 水 田</td> <td>N</td> <td>4</td> <td>(2)</td> <td>3</td> <td>7~ (9)</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8</td> </tr> </tbody> </table>					土 壤 条 件	成 分	10a当たり施用量 (kg)				基 肥	分けつ期 追 肥	穂肥	合 計	湿 田 半 湿 田	N	3	0	2~3	5~6	P ₂ O ₅	6	0	0	6	K ₂ O	5	0	2~3	7~8	乾 田	N	4	0	3	7	P ₂ O ₅	6	0	0	6	K ₂ O	5	0	3	8	漏 水 田	N	4	(2)	3	7~ (9)	P ₂ O ₅	6	0	0	6	K ₂ O	5	0	3	8
土 壤 条 件	成 分	10a当たり施用量 (kg)																																																														
		基 肥	分けつ期 追 肥	穂肥	合 計																																																											
湿 田 半 湿 田	N	3	0	2~3	5~6																																																											
	P ₂ O ₅	6	0	0	6																																																											
	K ₂ O	5	0	2~3	7~8																																																											
乾 田	N	4	0	3	7																																																											
	P ₂ O ₅	6	0	0	6																																																											
	K ₂ O	5	0	3	8																																																											
漏 水 田	N	4	(2)	3	7~ (9)																																																											
	P ₂ O ₅	6	0	0	6																																																											
	K ₂ O	5	0	3	8																																																											
		<p>(1) 穂肥は出穂前20日頃に施す。</p> <p>(2) 出穂前30~25日の追肥は倒伏を助長するので施用しない。ただし、早植で、出穂前25日頃にかなり肥切れした場合(標準葉色板で3~3.5)は、穂肥を2回に分け、25日前と15日前に1.5kg程度ずつ施す。</p> <p>(3) 水害常習地では窒素施用量を減じる。</p> <p>(4) 漏水田では葉色を見て、分けつ期追肥を窒素成分で2kg程度施用する。</p> <p>(5) 側条施肥の場合、基肥に速効性肥料を用いるときは、基肥量を上記基肥量の2~3割減とする。</p> <p>(6) 緩効性肥料を用いるときには全量基肥施肥とし、施肥量は上記合計量の2割減とする。</p>																																																														